

碩 心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
 神奈川 碩 心 会 発行

58年10月現在 会員数
 逗子地区 149名
 葉山地区 302名
 大船地区 63名
 (合計) (514名)

58年10月号 (135号)
 発行 者 萃 岳
 根 岸 岳 集
 編 村 愛 岳
 中 村 愛 岳

詩情 去来

沼間支部 武藤 嶺 風

九月十八日、夜来の雨も上り、曇り日ながら静かな朝を迎える。今日は碩心会の段位昇進試験日なり。何となく気が重い。温習会、試験と何回か壇上に立った事はありますが、やっぱり試験となると緊張する。奥伝試験の最後が私で終了。新田先生・常盤先生の受験者全体に対する講評を頂き散会となるも、私が最後の吟者なるがため、おマケがついて、何でもよいから感想を月報に書いてほしいとの依頼があった。詩吟は下手、頭は無知、書くは悪筆、恥をかく以外出来ない私に、大きな褒美ほびがついたものよ。今年は大当りだ!!

私が初めて詩吟を覚えたいと考えたのは、それは古い話：私の青春時代です。オヤ！青春時代なんて書く甘い夢の様な時と思われるかもしれませんが、私達の青春は戦争の真っ盛り：夢なぞ見る時代ではありませんでした。北支の戦地、新京の兵舎にて幹部候補生の教育に班付兵長として参加して張り切っておりまして。候補生の教育終了祝宴が開かれましたその席上、私より一年先輩の兵長が、乃木將軍作の漢詩二題を

夜気の當庭にしみ入る如く朗々と吟じた時でした。私は初めて本格的な詩吟を聞きました。その時の驚き、何とすばらしい音、節調の深み、然も哀愁をおびていて、私は何時の折か、覚えて吟じたいと深く心に残りました。南方戦線転出、そして敗戦、復員、混乱の中での生活戦線に皆夢中の時代でした。

やっと生活が落ち着いた時、昔の事が思い出されました。近くに住んでいる近藤君が会に入会しているのを知り、尋ねたところ「現在家の都合で脱会しているけれど入会希望なら三井先生が教えている沼間支部に入会したら」と助言を頂き、沼間支部に入会をお願いして今日に至りました。

週一回の教場ですが先生の熱心を御指導を頂き、本日奥伝試験に到達した次第です。今振り返ってみて、偶然とは云え、岳風流という伝統ある流派に、そして先輩諸氏の多数いられる地域の碩心会に入会した事は幸運だったと感じております。今後多数の先輩諸氏に続いて私達同期の奥伝の方々を手を取って、益々吟道に励みたいと思っております。

◎ 行事予定

- ◇ 第84回全国吟道大会
十月九日(日)
四国・高松
- ◇ 県本部
指導者吟道講座
十月十六日(日)
大津小学校講堂
- ◇ 第17回葉山町文化祭
詩吟詩舞の会
十一月三日(祭)
一色小学校体育館
- ◇ 第33回逗子市文化祭
詩吟詩舞発表会
十一月六日(日)
逗子図書館ホール
- ◇ 総本部主催レコード
吹込者発表大会
十一月二十日(日)
明治神宮記念館
- ◇ 県本部納吟会
十一月二十六日(土)
横浜交通会館
- ◇ 傾心会
逗子地区温習会
十二月二十五日(日)
逗子図書館ホール

◎ 師範位附与基準の 一部改正について

準師範・師範位の附与基準が一部改正され、昭和五十九年四月一日より実施されることになりました。詳細は各指導者に伝達してありますのでおたずね下さい。
許証部長

十月一日付

奥伝合格

鷺山祐風 伊藤朗風 佐藤魁風 高橋明風
行谷佳風 行谷正風 鈴木虎風 高橋桜風
小形雄風 小森香風 菊池隆風 阿部葵風
武藤嶺風

鷺山さんがんばる♪(上山口支部)

今回奥伝を受けられた鷺山祐風さんは、82歳の高齢で見事合格されました。このところ神経痛気味で、強い薬をのんでいたのに、のどを心配していられたましたが、その様な事を感じさせない元気な声、そして書取りもよい点を取られたとか。終っての講評の中で常盤本部長からも特におほめの言葉がありました。私達も若い方とならんで挑戦するその姿勢に心打たれました。皆さんで大きな拍手を送りましょう。

五十六花なら蕾

七十八十働きざかり

九十になって迎えがきたら

百迄待てと追い返す

(詩吟調で吟じてみましょう)
これからも益々がんばって下さい。

教場だより

常に前進をめざして

大船B支部 森田 暁岳

大船の教場へ主人(嶺風)と私が、吟の練習に行くようになったのは四十七年の夏で、当時会員数は四十名位でした。其の後大船A支部・B支部・戸塚支部とに分れる事になりました。当時B支部も二十四、五名おりましたが、今は常に顔を見せる人は十二名位です。会員数の変動はありましたが、私達B支部は三井先生の御指導をいただき、年一度の納吟会には前述の三教場の会員が一堂に集り、和気藹藹と一年間の反省し、色々と話し、一人一人が年間の成果を発表しあう等、楽しいひとときを過します。

又年二回の査定には振って参加し、傾心会の温習会も楽しみに練習に励み、常に前進を目ざして頑張っております。先生方の御指導を心からお願いたします。

最後に先生方はじめ、皆様の御健勝をお祈りして筆をおきます。

月照と

西郷南洲

安政五年（一八五八）十一月十六日、鹿児島錦江湾に身投げした二人の男があった。一人は力士のようにたくましい大男、一人は女のようにやさしい面をした僧侶。

それは世に言う安政の大獄が始まった年であった。一橋慶喜擁立派と尊皇攘夷派とに対する大老井伊直弼の苛酷な弾圧は高まった。

攘夷討幕の志を抱いていた京都清水寺の僧月照も、幕府に追われる身となった。西郷は、この月照を郷里薩摩にかくまおうとした。しかし、薩摩藩は、幕府の追及を恐れてこれを拒んだ。困った西郷は、月照とともに死を決意したのである。

夜の錦江湾に舟を漕ぎ出して飛び込んだ二人は、しかしほどなく引き上げられ、近くの民家に運ばれた。月照はすでにことごとく死んでいたが、西郷にはかすかに心臓の鼓動があった。人々が見守るうち、彼は巨体から幾度か水を吐いて、奇跡的によみがえったという。月照の遺書に、

曇りなき ころの月もさつま渦

沖の浪間にやがていりぬる

と記されており、生き残った西郷は月照の十七回忌に当り、次の様に詠んだ。

月照十七回忌

相約して淵に投ず後先無し

豈図らんや波上再生の縁

頭を回らせば十有余年の夢

空しく幽明を隔てて墓前に哭す

薩摩藩はめんどろな事態を恐れ、幕府の目をくらすべく、西郷に、奄美大島に身をひそめるよう命じた。藩主島津斉彬の特別のとりたてで「薩摩に西郷あり」と知られていた彼が、今ここに島住まいの身をかこつとは、だれが予測したであろうか。しかも主君斉彬は、すでに同じ年の七月、急病で世を去り、藩の実権は、その腹違いの弟久光に移っていた。西郷は、この地で島の娘愛可那を妻に迎え、一男一女をもうけた。その息子菊次郎は、のちに京都市長になった人である。後、大久保利通ら西郷の僚友の嘆願により三年後に帰藩を許された。しかしその間に天下の情勢は大きく変わっていた。

しかし、久光と西郷とは、どうしても、そりが合わなかった。そして西郷の旺盛な行動力は、たちまち久光の不興を買うこととなり、西郷は再び、久光の怒りに触れて、大島からもどって、わずか四カ月後、又島

流しの身となった。そして奄美大島よりはるかには辺境の徳之島、そしてさらには沖永良部島に送られたのである。死刑に次ぐ重罪人の扱いであった。西郷33歳―38歳の間であり、その時詠んだのが次の詩である。

獄中感有り

朝に恩遇を蒙りて夕に焚坑せらる

人生の浮沈晦明に似たり

縦光を回らさざるも葵は日に向う

若し運開く無きも意は誠を推さん

洛陽の知己皆鬼と為り

南嶼の俘囚独り生を窃む

生死何ぞ疑わん天の附与なるを

願わくは魂魄を留めて皇城を護らん

明治十年（一八七七）二月、征韓論に敗れ、鹿児島にひきこもっていた西郷は、ついに兵を起した。有名な西南の役である。谷干城守る熊本城に総攻撃をかけたが、苦戦し、田原坂に官軍を迎え撃ったが、惨敗に次ぐ惨敗で、本拠鹿児島に引き返し、岩崎谷の洞穴を出たところで流れ弾を受け、覚悟をきめ、別府普介の介錯で命を絶った。

城山 作者不詳

孤軍奮闘圍を破って還る

一百の里程墨壁の間

吾が剣は已に折れ吾が馬は斃る

秋風骨を埋む故郷の山

海南行

細川頼之

人生五十功無きを愧ず

花木春過ぎて夏巳に中ばなり

満室の蒼蠅掃えども去り難し

起って禅榻を尋ねて清風に臥せん

(解説)

頼之が晩年その志を達せず、功業の成しがたいのを知り、四国の讃岐に帰るに際してその心境を述べたもの。

(語意)

海南行：海南は讃岐、行は詩(案府)の一体であるが、ここでは志を達することを得ずして、海南の地に赴くほどの意で題したもの。

蒼蠅……青ばえ。讒言する小人にたとえる。禅榻……禅家の長椅子で、坐禅に用いる。

(通釈)

すでに自分は「人生五十」というその齡を過ぎてゐるのに、さしたる功績もないのはかえりみて恥ずかしい。今は花咲く木々も春のよそおいを終えて、夏となり、その夏も、はや半ばとなった。わが人生も、はや盛りを過ぎたことを痛感する。どこから来るのか、青蠅どもが部屋一杯に飛びまわ

り、うるさく人にたかり、払っても追い払うことができない(多くの小人どもが人を讒言して、勢力を張っているが、追いはらうことができない)。一つ、このあたりで、ここから立ちあがって、部屋のととで座禅椅子のあるところを探し、清らかな涼しい風に吹かれながら、その上で横になることとしようか。(小人の満ちているうるさい政治の場を去り、静かな田舎の役人として気楽な余生を送りたい)

(作者)

(一三二九一—一三九二) 南北朝時代の武将。源頼春の嫡子として元徳元年三河(愛知県)に生まれた。人となりは謹厚。読書を好み、和歌をよくし、また禅を修めた。足利尊氏に従って転戦し、山陽一帯をしずめ、又勢いにのって四国をも鎮定した。尊氏の子・義詮が病んだとき、讃岐から呼ばれ、幼少の義詮の子・義満を補佐するよう命ぜられた。義詮没後、頼之は遺命どおり義満を補佐したが、年まだ十四歳の義満は頼之の切諫を怒り、その後も頼之の権勢を忌み、周囲の者もまた二人の離間策をこうじるなどしたので、頼之は大功のなしがたきを感じ、天授五年職を辞し、髪をそって名を常久と改め、讃岐に帰った。時に頼之五十一歳。

(移籍)

532 角田照夫・銀詠支部より(沼田支部)へ

(入会)

596 白井敬二 逗子市沼間二一—三九

(葉月) (電)〇四六八—七—一六一〇三

597 高橋康郎 逗子市桜山六一—五—七

(葉月) (電)〇四六八—七—一七二六三

598 長島正子 横須賀市大滝町二—五

(一色B) (電)〇四六八—二—一四一一

599 加藤春吉 葉山町下山口一三七六

(一色B) (電)〇四六八—七—五—二八二四

600 加藤節子 葉山町堀内五〇三

(堀内A) (電)〇四六八—七—五—〇二二五

601 望月 薫(少) 葉山町堀内六六四

(上山口) (電)〇四六八—七—五—三三四〇五

